

『サッカーボールひとつで社会を変える ―スポーツを通じた社会開発の現場から―』  
岡田千あき著 大阪大学出版会 2014年

立命館大学大学院教職研究科2年次生 高岡 侑平

本書は、サッカーや国際問題に詳しくない人でも読みやすい内容で、発展途上国で行われている「サッカーで社会を変える」試みの事例を取り上げている本である。人の考えや行動に影響を及ぼす要因を6つの要因（個人内、対人間、組織、コミュニティ、社会、物質的環境）に分類した「ソーシャル・エコロジカル・モデル」に沿う形で事例が書かれている。

第2章の「ゆるやかな人間関係をつくる」では、ホームレスワールドカップの事例について書かれている。少し紹介する。ホームレスワールドカップとは、世界各国のホームレス（ホームレス状態にある人）のみが参加できるフットサルの世界大会である。日本代表の野武士ジャパンは、東京と大阪にチームを持っていた。その大阪チームの練習には、コーチ、スタッフ、選手、大学生のボランティアが参加していた。練習の場には、さまざまな人が集まり、同じことに熱中する空間が形成されていた。

「一緒にフットサルをしていて、この人たちはこれから外で寝るのか、自分は家のベッドで寝るのに複雑だ」（本書、61頁）

ドリブルで数人を抜き、格好よくシュートを決めていたボランティアの青年が他の参加者についてつぶやいた言葉である。この青年は、熱中してフットサルを練習している間に、ホームレス問題について向き合おうとしていた。

学校の授業で社会問題や国際問題について取り扱うことで、表面上の問題を理解することができる。しかし、社会問題や国際問題に真摯に向き合うためには、当事者と直接交流したり、何らかの関わりを持つことが必要でないかと、この章を読んで思った。

私は、国際教育と聴くと「私立学校や一部の公立学校でしかできない教育だ」「何をすれば国際教

育か分かりにくい」と感じていた。国際交流の一貫として、海外へ語学研修に行ったり、外部講師を招いて講演を聴いたりする学校がある。これは、英語で話すことに困難がない生徒にとってはとても有効な機会である。しかし、英語を使って交流することに苦手意識を持っている人が多いため、外国語を使ったコミュニケーションが原因で国際交流が滞ってしまう恐れがある。

**実際にはさまざまな理由で、国際協力への参加はハードルが高いものになっていると言わざるを得ない。では、できるだけ多くの人々が気軽に参加できる国際協力の方法としての「スポーツ」、**  
**「サッカー」というのはどうだろうか。**

（本書、264-265頁）

サッカーであれば、万国共通のルールでプレイでき、ボールひとつで非言語的なコミュニケーションを取ることができる。さらに、練習や試合では、選手どうしが片言の英語や他の言語を使って、自然に意思疎通をしようとすることができる。さらに、言葉が通じなくても、相手の考えや気持ちを理解しようとすることができる。この本を読んで、ホームレスワールドカップの練習に来ていた青年のように、何かに熱中して活動しながら、国際教育ができる方法を見つけたいと思った。

最後に、本書には、サッカーで社会を変える試みの内容だけではなく、関係者へのインタビューも紹介されている。これから国際教育を始められる教師にとって、学べべきことが多い内容であった。「アクティブ・ラーニング」の授業を組み立てていかなければならない。

